

読賣新聞

地球を 読む

古代ギリシャの歴史家ヘロドトス以来、政治を動かす代表的政体として、独裁政と寡頭政と民主政が挙げられてきた。ペルシャ人は責任を問わない君主の独裁を選び取り、スパルタ人は度し難い貴族の寡頭政を好み、アテナイ人は混じり気なしの自治の民主政を受け入れた。

それぞれ失敗すると、独裁政ではその無責任さが暴



山内 昌之
明治大学特任教授

北朝鮮と中東

思慮欠如が招く政治危機

氏の冷酷な独裁政治は、核実験やミサイルによる無責任な軍事挑発を戦争の瀬戸際まで追求している。

習近平国家主席と中国共産党の寡頭エリート支配は、東・南シナ海における無分別な国際法無視や他国

の領土領海侵犯を繰り返す。その反面、北朝鮮の核ミサイル開発に寛容すぎたあまり、中国の安全保障さえ究極的に脅かす力を北朝鮮に与えてしまった。

平等主義と絶対平和主義を至上の価値観に高めがち

ハニ大統領らによるイランの「寡頭政」は、内部対立をばらみながら、「新月の弧」ともいべき勢力圏を創り上げることに成功した。テヘランからバグダッド、ダマスカスからシリア、地中海岸タルトゥスやレバノンのペイルストに至るイスラム教シーア派の三日月地帯である。

他方、議会制民主主義が久しく保たれ、中東では稀な法の支配が確立していたトルコの「民主政」では、エルドアン大統領の政権長期化によってポピュリズムと衆愚政治の色彩が強まっている。

△2面に続く▽

地球を 読む

1面の続き

山内昌之氏 1947年、札幌生まれ。カイロ大客員助教授、ハーバード大客員研究員、東大中東地域研究センター長を歴任。東大名誉教授。

北東アジアの北朝鮮と中東のシリアで並行する大危機には、大きな違いが一つある。それは、北朝鮮が核と中長距離ミサイルを保有する現実によって、通常兵器次元の劣勢を解消し、少なくとも一度は核兵器を先制使用できる立場を獲得したことだ。

使用するか、政治体制が崩壊するかのジレンマを犯すことはない。

もともとイスラエルは、自国の核保有については明言しないまま、域内の他国の核ミサイル開発を許さず、空爆や破壊工作で警告してきた。

クルド「独立」試練さらに

使用するか、政治体制が崩壊するかのジレンマを犯すことはない。

もともとイスラエルは、自国の核保有については明言しないまま、域内の他国の核ミサイル開発を許さず、空爆や破壊工作で警告してきた。

9月7日、シリア中部ハマ郊外のミサイル製造工場とみられるアサド政権軍施設を相手にすると、その

ののが長期的には望ましい(ヤドリン元イスラエル軍謀報局長官)という論理である。春秋の筆法をもちてすれば、米国や日本はこの真理に鈍感だったために、いま北朝鮮の核の恫喝に悩む結果になったと言えるのかもしれない。

注目すべきは、シリアに防空システムを張り巡らすロシアの反応である。ロシアはなぜ、防空地域内のハマ郊外に対するイスラエル軍の攻撃に沈黙を保ったのか。地中海に面したタルトゥス軍港には、イスラエル、トルコ、イラクなど

空システムが設置されている。ロシアはイスラエルのシリア軍施設攻撃がイランへの警告であり、ロシアへの攻撃でないことを事前に諒解していたのだろう。

一連の展開と対応を見れば、中東では、域内外の諸国家が個々の利益を追求し、時に武力が行使されるパワーゲームを繰り返している。互いに警告の意味を解し、行き過ぎた行動を自制する一定のルールが働いていることがわかる。

古代、覇権を失ったある独裁者は、無念の運命を呪い、「あなたは私の燭を燃らたて、そして私を灰にしようとする」と述べた。

北朝鮮の金正恩氏は挑発をエスカレートさせる原因をトランプ大統領の発言に求めている。北東アジアで偶発的に戦争を起さないとためにも、中東の歴史と現実から学ぶべき点は多い。

英文はあすのジャパン・ニュースに掲載する予定です